

世田谷村日記

石山修武

七月二六日

十時院入試面接。石山研合格は四名、保留二名。厳しい結果になったが仕方無い事だ。十五時中川、友部、栗畑、聖徳寺住職来室。十九時赤坂中華料理屋、西谷主任慰労会。佐藤滋、入江正之両教授と二時過迄飲む。

七月二八日

まだ梅雨が明けぬ。昨今の世情に似ている。今朝のミーティングはしっかりやろう。天気任せにはできない。終日打合わせ、その他。

七月二九日

朝学部最終レクチャー。唐桑ものがたりについて話した。昼過ぎ突然淡路島の山田脩二来室。全く変わりが無いな脩ちゃん。これくらい変わらぬ人物も稀だ。研究室ミーティングに同席してもらい、夕方早々に新大久保駅前のソバ屋で飲む。良い酒だった。十八時半別れ。アト何回脩ちゃんとは飲めるかな。十九時過、J・ライターと会食。ライターとは十一月にヴェネチアで再会する事になるだろう。二十一時半世田谷村に戻る。聖徳寺打ち合わせ。ようやく仕事のペースがつかめてきたな森川は。

七月三〇日

朝大学へ。主任会の報告を聞くため。ついでにホームページの改善の事少し進めよう。世田谷村スタッフも一つ良い建築を設計出来たら一皮むけるのだろうに。今のままでは建築同好会サークルだな。十勝の地階の見積りがでてきた。少し高い。十一時半西谷主任とお茶を飲む。十三時半何人かの社会人、留学生の相談に乗る。しかし、世の中にはまだ居るんだナア。本物のわからず屋が。十六時世田谷村へ帰ろうか。戻っても何があるわけでもないがね。J・ライターがベルリンへ帰ったので、研究室はまた一層空虚になった。世田谷地下は八月九月の大学夏期休暇中は大学に引越す事にした。李祖原、J・ライターも休みなので、彼等のスペースを使わせてもらう事にする。大学では設計はできぬと観念して、世田谷地下に移動したのだが、地下に移つてもさしたる成果が得られた訳でもない。それなら人の居ない夏休み中は大学の空きスペースを存分に使わせてもらおうと考えたのだ。十七時四五分三年生黒田設計を見る。

七月三一日

今日で七月も終わるか。八月を準備期間にして、九月から世田谷村日記の書き方を変えようと考えている。このメモはずでに私の個人的記録の意味を少し計り超えはじめている。見知らぬ人が多数読んでいるのは確かだし、それを考慮しなければメモ自体が成り立たぬ現実にもなった。私自身には守らねばならぬプライバシーは無いに等しいし、書いて良い事と、書いては人を傷つけてしまう事くらいは自己のけじめは自分でつけているつもりだ。当然私だつて出来るだけ多くの人に読んでもらおうと考えてこのメモを記している。新聞・TV・雑誌等既存のマスメディアを介しては言えぬ事、発表できにくい事を私のホームページを介して表現し

ている積りだ。日記形式のの良いところはズルズルに、簡単にたれ流せる事だ。欠点も又同じところに在る。形式・方法が視えぬモノは建築だって私は好きじゃない。でも、その好きではない事に近い事をこのメモではやってきた。三年以上もやってきた。メモとして書いた量は膨大なものになっている。それはそれで私には価値があつた。私的な記録としては自分にとっては、とても貴重だ。建築のエスキスブック、スケッチブックの類はほとんど全てを保管してある。これは捨てられぬ。十年も、二〇年も昔のエスキスブックに明日につながるアイデアが埋まっている事が時々ある。それと同じで、チョツとした思い付きを言葉でメモしておく事は私にとって、とても大事な事なのだ。しかし、先日もある高校生から、何故あなたは日記を公開するのかと問う手紙もいただいた。単なる自己露出欲だとも言えず、しばし考えた。明解な答えは得ていない。しかし、日記形式を超えるなんらかの書く方法、形式を持たぬと、こういう類の自然で真実な疑問には答えられぬ事も知った。

一ヶ月の準備期間を置いて秋には少しマシなスタイルに進化させて、日記は続けたい。八月はそのトレーニング期間だから、ちよつとスタイルは混乱するだろう。三年くらい前にこのメモを始めた時は、明らかに個人用の記録だった。あるいは友人達への近況報告の意味もあつた。しかし、すでにその域を超えてしまった読者が生まれてしまった。その事実に対応する形式が必要になつた。マ、考えようでは、その為に三年間のトレーニングを重ねてきたとも言えるだろう。